

【一般口演2】 第5席

『世医得効方』の鍼灸について

神奈川 上田 善信

金元医学が、明清医学や近世日本の医学に対して大きく影響していることはいうまでもない。『世医得効方』もまた『普濟方』『證治準繩』や、曲直瀬道三『啓迪集』に引用されているばかりでなく、特に朝鮮では李朝期における必修書となっていた。

危亦林が撰じた『世医得効方』20巻（巻20を付録として扱い全19巻とする場合が多い）は、骨折、脱臼の整復法や脊柱骨折の懸吊復位法など、骨傷科に対する論述が高く評価されている医学全書である。本書の編目は13科に分類編集されているが、王充転序、陳志序によると、それは『聖濟総録』に倣ったものであるという。

著者・危亦林の生没年は不明であるが、自序によると医家の5世で字を達斎といい、幼い頃より医学を学び、古方や近代名医の諸方を集めた。そしてそれらの医方と家伝や経験したものによって本書『世医得効方』を編集し、至元3年（1337）に完成、至正3年（1343）に陳志の序を付して刊行された。この序文によって、本書の刊行が、危亦林の存命中に行われたことがわかる。

本書は、1990年出版の中国活字本の校勘記によると、引用書の明示はないものの、『三因方』『嚴氏濟生方』『朱氏集驗方』『婦人大全良方』等が多く引用されているという。鍼灸関連の記載をみると、『資生経』『蘇沈良方』が1箇所みられるだけで、その他の引用についての明示はないが、多くは『千金方』からの引用と思われる。

本発表は、『世医得効方』の鍼灸を検討することにより、金元鍼灸の様相を明らかにする一助とするものである。